

地域の親子の子育てに寄り添って

丸山政子さん

(特定非営利活動法人 子育て支援の NPO まめっこ 前理事長)

<プロフィール>

丸山政子さん

1950年生まれ、1973年結婚を機に名古屋に転居し、子育て支援ボランティア活動を開始。1998年名古屋市海外女性派遣としてイタリア・フランス。2000年「親も子ども主人公」をモットーにNPO法人子育て支援のNPOまめっこ理事長。2001年福祉医療機構社会福祉振興助成カナダ視察。2003年商店街に子育てひろば「遊モア」開設。2005年NPO法人子育てひろば全国連絡協議会理事。2013年理事長退任後名誉顧問として理事となる。NPO法人子育てひろば全国連絡協議会アドバイザー。2015年名古屋市子ども・子育て支援センター長。2016年から現在は名誉顧問として理事として担う。



<参考>

子育て支援のNPOまめっこ ホームページ
<https://mamekko.org/>

インタビュー日時：2024年12月4日

聞き手：松村智史（人間文化研究科/都市政策研究センター）

松村 どうぞ、今日はよろしくお願ひいたします。丸山さんからお話を伺えるということで、とても楽しみにしております。よろしくお願ひいたします。

丸山 こちらこそお願ひいたします。

松村 では、質問なんですけれども、まず皆さんに、生い立ちですとか、可能な範囲で結構なんですけれども、教えていただけますでしょうか。

丸山 1950年生まれの私は、父が公務員、母が専業主婦の、いわゆる転勤族で3人兄弟の長女として、育ちました。群馬県の前橋市で高校を卒業し、そこで就職し、結婚しました。女性の幸せは、結婚とか良き母や妻になることが当たり前だったという時代で。まして転勤族って公務員住宅に住むものですから、女性の生き方のモデルは専業主婦ばかりでした。1973年23歳の時です。そのとき夫の転勤が決まり、名古屋で生活することになりました。群馬県の小さな町から名古屋市という大きな町に来て、毎日が戸惑う中、1976年に長女を出産し、78年に次女が生まれました。全然慣れない土地での子育てってというのはとてもとても大変です。夫に相談したいときでも、ほぼほぼ家になくて……。

松村 そうでしたか。

丸山 いないので、前橋の母に電話をかけていました。すごく心細い、不安感が多い子育ての経験があります。

松村 ご自身の経験として、そういう苦労

というか、子育てが大変でいらしたと。おじいちゃんおばあちゃんがなくて、旦那さんが日中家にいない間は、本当に子どもと2人で向かい合わざるを得ませんよね。

丸山 そうなんです。私は普段、自宅とスーパーと公園の生活です。この3拠点を歩き来していました。幼稚園に行くようになって近所のお友だちができました。

松村 今と違ってネットとかLINEとかもない時代ですからね。

丸山 そうです。そんな中で子育てがスタートしたので、子育て不安ってということが身に染みていたというか。結局、子どもの命を全面的に私が責任持って育てなきゃいけないという、この「重圧」。

松村 分かります。

丸山 たまに帰ってくる夫。子どもは慣れてなくて、パパのそばに行かないし、パパもどうやってやったらいいか分からないし、とても大変でした。

松村 いや、すごい。お察しします。

丸山 不在の多い夫との子育て経験を経て、やっぱり私だけで育てるのはすごい怖い。怖いつてというか自信がない、不安だな、不安感の下、育てていたので、図書館に行ったり、生協活動をしたり、地域の子ども会に入ったりしていました。そこでボランティア活動することになるんですよ。そして、友だちがだんだん増えていきました。最初の子育て仲間を創ったのです。

子どもたちが幼稚園に行くときちょっと暇になるので、北区生学習センターを会場にしているパッチワークの会に入りました。そこで「託児ボランティアを募集してるから来ませんか」とセンター職員から誘われて「託児グループめだか」に入りました。保育士の資格がなくてもボランティアだし、研修とかあるので託児ボランティアができると誘われて始めたんです。

松村 それはお子さんの年齢で言うと、おいくつぐらいですか。

丸山 下の子が幼稚園だから、上の子、小学生ぐらいですね。



松村 下の子がまだ幼稚園だと、完全にまだ目が離せない時期だとも思うんですけども、その中でもボランティアができたものですか。

丸山 子どもの帰宅時間に合わせて、ボランティアが帰れるような配慮があったので、私が自由に使える10時から2時ぐらいまでのボランティアをしていました。

松村 お母さん自身の、さっきおっしゃったような社会からの孤独感とか疎外感とかっていうことを解消しないと、親子の笑顔は失われますからね。

丸山 サークル活動を始めたころ、たまたま朝日新聞の社説に『あなた好みの女になりたい』っていう社説が載ったんです。

松村 どういう内容ですか。

丸山 奥村チヨという歌手が『あなた好みの女になりたい』っていう歌を歌ったの、知りませんか。歌あるんですよ。後で聞いてみてください。

松村 昭和歌謡みたいな感じの。



丸山 そう、まさに昭和歌謡です。それで、それと同じタイトルで、社説の記事を読んだんです。このあなたってというのが国なんですけど、国はどんな女性を望むかっていうことが書いてあって。若い頃は学校へ行き、卒業したら結婚して、子育てして。その後パート労働して、おじいちゃんおばあちゃんの介護をして、最後に夫をみとってから死んでくださいっていうことを推奨していると受け取りました。

松村 なるほど。この社説は、今おっしゃ

ったように、国が望む当時の女性のライフストーリーみたいなのを、表現しているんですね。記事は賛同の立場で書かれたものではないですよ。

丸山 ええ、「専業主婦政策」に対して、これでいいのかという問い掛けの観点で書かれていたと思います。

松村 そうなんですね。じゃあ当時は、良妻賢母的な女性像が、望ましかったのですね。

丸山 そうです。

松村 そういう家族のケアを引き受け、自己犠牲を払い、自分のキャリアよりも。

丸山 もう一つは、子どもからの問い掛けです。私、子どもに、大きくなったら何になる？って聞いていました。そうすると、幼稚園の先生だとか、ケーキ屋さんだとか、花屋さんだとか言ってくるわけですよ。そしたら子どもから、お母さん大きくなったら何になるの？って聞かれたんですよ。

松村 ほう。

丸山 自分の生き方を問われたんです。この頃の新聞記事には、子どものいじめとか自殺がしょっちゅう話題に上がっていて。子育てをしている自分の子がいじめられても嫌だし、いじめても嫌だと思わなければならない。多分みんな、どこのお母さんもそう思いますよね。でもどうしてそれが起きるのか、それは、育てている母親側に責任があったりするのかな。こういうことを考えな

がら、悶々とした子育て期を過ごしたような記憶もあります。

松村 そうでしたか。そういうこともあったのですね。

丸山 やっぱり自分の時間ができたってことが大きいと思うんですよね。「大きくなったら何になるの？お母さん」って言われた問い掛け、新聞には自殺やいじめが連日載って、そして、あなた好みの女になりたいという政策！この時に託児ボランティアに声掛けられたことが大きいです。

託児だけじゃなくてもう一つ、「赤ちゃんと一緒」という講座をしました。

人間の学習権というのは、生まれたときからあるんだというのを学んで、赤ちゃんだって学習権がある。それなら「赤ちゃんの学ぶ場が欲しいよね」ということで保育士である 2 人の女性と講座を実施しました。この講座を実施する上で、当初は生涯学習センターの職員会議では全員から反対されました。「赤ちゃんを連れてここまで来ない」とか「赤ちゃんは家にいるだろう」ということで。職員全員男性ですからね。粘り強くお願いして「一回やらせてほしい」ということで一回やったんですよ。そしたらなんと抽選ができるぐらいママが並んじゃったんですよ。赤ちゃん連れの親子が。

松村 嬉しい誤算だったのですね。

丸山 その後、「赤ちゃん講座」は全区に広がったんですよ。

松村 じゃあそこからどんどん広がって

いったイメージなんですね。

丸山 講座が終わった感想も、またこういうのしてほしいって声がいっぱい上がったんですよ。

松村 盛況ですね。このときは記念的というか、こんなに需要が、こんなにニーズがあるんだっていうことを、皆さんもう肌身で感じて、これは必要な事業だということでもどんどん広がっていった。

丸山 そうなんですけど、生涯学習センターの講座は予算で動くんですよ、いい講座でも予算がないと削られちゃうんです。だから、それに嫌気がさして、私は託児グループを退会しました。

松村 そうでしたか。

丸山 その後親子教室のスタッフになったんです。ワーカーズコレクティブっていう働き方をしている方を知って。

松村 親子教室は、今で言う、応援拠点とかのはしりみたいな感じですよ。

丸山 拠点とは違い参加費をいただいて運営します、すごい人気で、順番待ちだったんです。北区をはじめ千種区・名東区、西区、中村区、稲沢市に広がっていきました。

ここの親子教室は独自のプログラムを持っていて定員 10 組・10 時から 12 時、10 回コースで 2 万円かかりました。遊ぶ時間とディスカッションの時間。お互いにこどもを見合っただけでディスカッションの時

間を保証する。ディスカッションテーマは子育てのこと・夫婦のこと・生き方などを話します。親子がすごくリフレッシュする。それが人気で、7年間やっていました。

松村 7年間もですか。

丸山 その後、子育て環境が変わってきて、ママたちが主体的にサークル活動をするようになったんです。会場費を集めて、ママサークルが誕生しました。

松村 自分たちで、自発的に、自由発生的にママたちの仲間内のサークルができて、その中で場所借りて情報交換とか、交流するっていうのが増えていったんですね。

その背景には、どんなことがあるんですか。自然に拡大していったとか？

丸山 自然というか、やっぱりママたちが家庭に居たたまれないと思います。その中心だったのが幼稚園退職者の先生とか、保育園の退職者の先生とかでしたね。ママサークルが増えていきました。

松村 なるほど。

丸山 大阪の大学のI先生がその研究をしていました。

松村 分かりました、ちょっと調べておきます。

丸山 そんな時、びーのびーのさん（注：認定NPO法人（横浜市））の情報が入ってきたんです。

松村 ここで、びーのびーのさんが現れるわけですね。

丸山 そう、いろんな本を私も読みあさっていたので、カナダのことが書いてあった「サラダボールの国カナダ」という本を読んで、それが、びーのびーのさん、を中心に動かした大学のI先生です。この本を読んで、「横浜に見に行こうよ」って仲間で、びーのびーのさんを見に行きました。商店街の一角を借りて親子のひろば。これからの時代はこれなんだなって思い2003年に覚悟を決めて子育て広場を商店街に立ち上げました。

松村 びーのびーのさんも2000年だったような気がするので、じゃあ本当に、その後ぐらいですかね。

丸山 そうですよ。「とにかく開設して2週間しかたってないのよ」って理事長さんが説明してくれた。「ちょっと丸山さん待ってくれる？今、保育園に子どもを迎えに行くから」と言ってすぐ戻ってきた。子育て中のママがスタッフだった。

松村 では、別の団体も参考にしつつ、いよいよ2000年に「まめっこ」さんが設立されたというところですね。

自分たちで探すっていう発想っていうか。

丸山 物件を自分たちで探すんですが。家賃や耐震が何年度以降じゃないといけないとかや駐車場が何台ですとか、いろんな条件があつてすごく大変なんですよ。

松村 分かります。子ども、うるさいから貸してくれないとかいろんな人いますもんね。

丸山 経済産業省の空き店舗活用事業を申請して柳原通商店街になごや集いの広場を立ち上げました。商店街の理事たちから「何するんだね」って聞かれたので「親子で遊ぶ広場です」と答えました。

商店街理事長さんから「子どもはほっときゃ育つよ」「子どもは外で遊ぶもんだ」と言われましたが、「ここに来る子は赤ちゃんから3歳で、赤ちゃんはハイハイして公園では遊ばせん」って応えたら、「そうか」って理解してくれるわけですよ、そして商店街に広場を持つことができた。

松村 なるほどですね。



遊モアオープンの時の様子。地域の方を交えてのテープカット（写真提供：本人）

丸山 やりがいは、親御さんからは、「ここがあって助かった」とか「ここは親子の保育園だね」って言われました。

松村 親子の保育園。子どもだけじゃなくてってことですね。

親子、丸ごと入れるっていうのは、確かにこれまでの保育園とか幼稚園とは違いますもんね。

丸山 そう。そして毎日来て、楽しく遊んでおしゃべりできるから、子育てが楽しくなってきたって言われたんです。当初は商店街の理事以下全員男性ですから理解されませんでした。

松村 ご苦労もなさり、頑張りましたね。

丸山 利用者さんから利用料をいただいて運営をしていました。商店街からは、「一日何しているの」って聞かれて、「一日遊んでいます」って言ったら、「いい身分だね」って言われました。一方商店街には、肉屋さん、自転車屋さん、お弁当屋さん、床屋さん、があるのでママたちが買いものに行くわけですよ、そうすると商店街はお金が動くわけですよ。

松村 活気も出ますしね。

丸山 そう、活気も出るんですよ。そしてどんどん利用者が増えていって、商店街に、広場があることは有効なんだってやっと分かってくれて、認知はされました。

松村 ここでまた、大きな前進というか、

丸山 スタッフはみんな子育て中だったし、子どもに学費かかるから、ボランティアはやっていられないって残ったのは私だけ。でも今まで関わっていた女性たちが、私のサポートに入ってくれてやるようになって、それで何とかつないでいたんです。

あとは、いろいろ事業をすると助成金をもらえるのでその助成金でやりくりしました。

松村 そこら辺は経営的というか、戦略的なセンスとかも必要だと思うんですけど、正直、ずっとこれまで主婦とか子育て関係に携わってこられた丸山さんも、苦勞されたところとかも。

丸山 ここが一番苦勞ですよ。

松村 そうですか。

丸山 お母さんたちも、利用者さんなんだけど、スタッフみたいに一緒にやってくれた。大学生も何人か見学に来てたんです。その中の大学卒業生が、「虐待の予防のために働きたい」って言ってくれたんです。給料としては少額でしたが 5 年働いてくれたんですよ。

松村 すばらしい。

丸山 だから本当にいい人の集まり。

松村 きっと丸山さんの人徳ですから、これまでの活動をご覧になられた方が共感されたということだと思います。



子育てひろばの様子（写真提供：本人）

丸山 事業に共感してくれたっていうのがうれしいですね。

松村 最初は割と本当に、いい意味での草の根というか、素人感と言ったら変かもしれないですけど、そういう主婦たちが、NPO とはいえども経営とかお金とかを常に考えなきゃならない世界になるって、ステージが変わってくると思うんですけど、そこら辺の脱皮っていうか、そこら辺の移り変わりとか、難しそうだなって気もするんですけど、どうですか。

丸山 女性も自立をしないといけないっていうのがあったんです。それは精神的な自立だけじゃなくて経済的な自立ね。NPO 法人格を取るときに迷ったんです。NPO

法人でいいのか？って。

NPO 法人になったとき、非営利っていうことが、ボランティアって認識されることが多くって。一方で、名大の先生の勉強会に参加していました、非営利でもアメリカはちゃんと給料払って仕事をしている。事務局側は仕事で、その他の人はボランティア。全てがボランティアではないっていうのを学んでいたのです。ボランティアしたい人はボランティアを選択し、それをコーディネートする人は有償でいいと思っていました。「いつかはちゃんとお金を得るようにするぞ」という意識はずっとありました。

松村 そうなんですね。

丸山 子育て支援という事業は、お金を得るのはとても難しい。そこで広場事業以外で事務局費用が入るような愛知県や名古屋市の助成金事業に手を挙げて運営をしてきました。まさにいばらの道でした。

松村 そのときは、さっきの名大の方だったりとか、愛教大の方だったりとか、背中を押してくれた仲間とかスタッフはいらっしゃったんですか。

丸山 はい。仲間は背中を押してくれましたね。

そして「NPO って何？」って、あちこちから言われて。私はいろんな事例を学びそれを話して、理解者を増やしていきました。

松村 そういう、背中を押してくれた仲間がいつも、今伺っても、丸山さん自身がすごく主体的に行動された結果っていう気

がする。そういう側面、かなり強いような感じがしますね。

丸山 最初のこれですよ。お母さん、大きくなったら何になるのかという問い掛け。娘たちが社会に出て行くときに、私がプレゼントできるものは、身近な社会を変えることで、実は夫を変えることにもなるかと思ったのです。働き過ぎの夫を家庭に戻し、家事ができる夫になれば、退職した時、台所に立てるような男性にしたいって思ったので、途中から男性の生き方講座っていうのもやり始めるのです。

私が行動すれば、私の周りも変わる。

松村 すごい原動力っていうか、今のお話を聞いていけば、そうなんだっていう気がしますけども。

丸山 虎年なんです。

松村 いや、すごいです、はい。

丸山 商店街からはちょっとずつ認められるようになりました。そして 2015 年、法律が変わって「子ども・子育て支援法」ができた。そこから急に名古屋市も変わりました。

松村 そうですか。

丸山 はい。やっぱり法律が変わるって大きくて、後ろ盾ができるってことですよね。その後名古屋市子ども・子育て支援センター通称：758（なごや）キッズステーションが民間委託され、まめっこが受託しました。市内中学校区に 112 か所の拠点

が拡がりました。子育て支援環境も充実してきました。

一方で一時預かりも要望が高くて、広場に来ると、「ここで預かってもらえないんですか」という声がいっぱいあったのです。その当時の副市長が広場利用者にアンケート調査をしました。その結果一番要望が多かったのが一時預かり事業だったんです。そして各区に応援拠点として、預かりできる広場を設けることになりました。

松村 それ、いつの話ですかね。

丸山 今から5年前スタートしました。現在、15区で事業しています。1年ごとに4カ所ずつ増やしていったんです。

松村 そうなんですか。

丸山 名古屋市に16区応援拠点を開設するっていうのはとてもいいことなんだけど、基準のレベルは維持したいじゃないですか。そこをするには、ネットワークが必要だと思ったんです。5年前から応援拠点の4団体を取った時に、「応援拠点ネットワーク交流会」というのを作ったんです。これは行政の方は入ってないんです、自分たちだけなんです。当初の4団体に相談したら、私たちも初めてなので、一時預かりのある広場ってでも悩みなどを話し合いたいっていうことがあり、場所は758（なごや）キッズステーションで、代表とか世話人は輪番でやろうね。と自主活動をしています。

松村 それは完全に、いい意味で行政から独立した自分たちの学びとか質の担保っ

て いうわけですか。

丸山 そう。この5年間で応援拠点の仕様書の見直しなどをしてきました。



オレンジリボンイベントの時の様子（写真提供：本人）

松村 拠点側のネットワークとか、拠点側の声が反映されてきているということですかね。

丸山 そうです。また重層と関わってきているので、応援拠点の職員のアンテナの高さが求められます。現場では、例えば、熱があるのに、無理に連れてきちゃった親に、どう伝えたらいいの？とか、「他の団体どうしてる？」って聞くと、たくさんの知恵や情報がもらえます。

松村 拠点同士の横のつながりの、悩みの共有だとかノウハウの共有ってすごく重要な気がしますね。

丸山 そこが今、一番重要で、広場は広場の研修をするんですよ、全協から紹介される広場研修だったのですが、「一時預かりの研修」って、保育園の「一時預かり」の研修とも違います。保育園は集団保育をしている子どもたちの中で、ひとりひとり

の子どもを見るわけですよ。そうすると先生たちは、この子たちの日常の生活や成長を知っているから、子どもたちにとっては、泣くかもしれないけど何とか仲間に入れちゃったりするわけ。だけど、広場の「一時預かり」って、広場で親子が遊んでいる中に、親のいない子どもがスタッフと一緒に遊びに入ってくるわけですよ。子どもの置かれた環境が違う。

松村 なるほど。

丸山 ずっと泣いている子がいると、「え、ずっと泣かせているの？」って言って否定的に見るママがいる、泣く子がだんだん慣れてきて、遊んでいる姿を見ると、「泣くけど子どもって成長するのね」っていうことを知るんですよ。そこのつなぎをスタッフがするわけですよ。そうすると、それなりの研修が必要なんですよ。

松村 なかなか高度な。

丸山 高度なんです。今、10年目で拠点っていうのが認識されているから、応援拠点の重要性、スタッフのスキルの高さと、その中の一時預かりのスキルの高さを、一般の人に伝えることがすごく難しくって。これ、何とかしたいって、思っています。

松村 今、お話を直接伺って、ご丁寧にお話くださったので、やっと理解できましたけど、普通から見ると分かんないでしょうね。

丸山 そうなんです。だから、よく保育士資格のある方が、応援拠点に雇われた1年

目は、「え、広場でも遊ぶのですか？親子の所にママがいない子ども入れたらかわいそうじゃないですか、」という保育士もいます。「それは考え方だよ」って。かわいそうって見たらこの子はかわいそうだけど、この子だって力があって慣れてくるんだから、「広場の親子とスタッフと一緒に見守っていきましょうね」っていうふうに、そういう空気感をつくらないと、この子は孤立しちゃうからねって。私はこれこそ虐待の予防の場の仕事だと思っているんです。

地域で生活していると、スーパーで、バス停で「丸山さん！」って声掛けられるし、病院に行くと「〇〇ちゃんのママや、〇〇ちゃんのママに会いました。」ってよく聞きます。知り合ってつながっていくんですよ。そして、気になる親子がいたとき、名古屋市が今後取り組むアウトリーチ事業を生かしていくことができます。監視じゃなくて、支え合うっていう関係が、できると思っているんですよ。

松村 なるほどですね。

丸山 課題を感じる温度差はありますが、親子の広場や応援拠点を運営する者として、少しずつ共通の視点を持って支援していけるようにしていきたいです。

松村 了解です、ありがとうございます。

丸山 要望としては、子育てひろば全国連絡協議会が、「全国子育てひろば実践交流」を年1回開催しています。今年は山口県でした。参加したことありますか。

松村 私はないですね。

丸山 ないんですね。その実践交流会に行くと、厚労省の分厚い資料と、各地域の広場の事例検討があったり、またテーマ別に勉強会するセミナーが開催されます。そこで国の情報を知るんです。行政の人にはそういう情報を得る場所とか、支援の場には来てほしいと思います。長野県で全国実践交流会が開催されたとき、広場見学をしました。その広場の壁には「広場 10 周年記念」に市長が広場に来てスタッフと利用者さんと市長を囲んだ写真が飾ってあったんですよ。

松村 それがネットワークってことですね、今で言うと。

丸山 そうなんです。 「子育て広場全国連絡協議会」は全国の親子の広場スタッフのつながりができる場です。現場の課題や成功例など各団体の代表たちとの交流は心強いし、同じ目的で事業をしている仲間との出会いはモチベーションが保てます。名古屋でも「応援拠点ネットワーク交流会」を育てていきたいと思っています。私は思いが共有できるように毎回会議にオブザーバーとして参加しています。名古屋市だけでなく東海地方全体にもネットワークが広げられたらいいなと思っています。



松村 でも大事なことですね。名古屋だけじゃなくても、東海地方全体にそういう底上げというか、ネットワークは重要な気がしますね。

丸山 はい。私は子育て支援という言葉で抵抗ある人もいると思うけど、やっぱり「街が変わるな」って思っていて。私が最初 2000 年のときには、私をサポートしてくれる学生さんがいて、そこに親子教室を利用したママたちが応援してくれて、何とか広場を立ち上げてやった。その当時は本当に 2 人でわいわい言いながらやっていたのに、今認定 NPO になり、それから 758 (なごや) キッズステーションを受託して、予算規模もすごく大きくなって、スタッフも増えました。

やっぱり街は変わっていくと思うんですよ。北区在住のスタッフが 3 分の 1 いるんですよ。

松村 そうなんです、地元って感じですか、元利用者さんには。

丸山 元利用者さん。利用者で、その後スタッフになった人もいます。そういう意味では、人口減少になって、地域のスーパーが無くなったり、老人が多くなったり街が変わってきました。子育てや介護をしながら地域の中に働ける場があるっていうことが大切だと思うんです。柔軟に働ける地域社会。短時間でも社会とつながっている。子どもとの時間が持てて、介護も心を寄り添えることができるっていう、そういう地域をつくるのが大事だと思います。そういう場所を作りたい。そのために、「まめっこがそういう形を見せること

が大事だと今取り組んでいます。子育てに関わりながら、多様な働き方を創る拠点の役割があると思っています。

また、「あおぞら広場」っていうのもやっていて、親子が地域の公園に出て、地域の人たちや主任児童委員さんと遊びながら交流もできますし、公園で過ごすおじいちゃんやおばあちゃんたちも子育て仲間に巻き込むことができます。「あの人怪しいね」じゃなくて、「地域の子どもたちを、みんなで見守ろうね」という空気感を公園から創ります。また企業との連携ですが、そこで企画したのが「家族の絆レストラン」です。企業にまず寄付を求めます。この営業は大変です。その寄付金と参加費が原資になって、レストランと託児室を借り上げ「家族の絆レストラン」が実施できるので

松村 パパのクッキングですね、これ。

丸山 5組のパパが料理を作ります。その後2人で食事をして夫婦の時間をつくります。その間子どもは料理をしない5組の家族と一緒に遊んでいます。スタッフと学生ボランティアを入れて、みんなで遊び、見守ります。



松村 なるほど。

丸山 ママから離れた子はほとんど泣いています。抱っこしても泣き止まない子、中には諦めて遊ぶ子もいるんです。いろいろな子どもと過ごす貴重な体験です。

松村 なるほど、面白いですね。

丸山 いいでしょう。2人の世界は、ラブラブです。特に、よその子を見る機会がないパパにとって、よその子と遊ぶパパもいますし、自分の子を見ながらよその子どもの成長とか、遊び方を見たり、夫婦で子どもと一緒に遊んだり、相互子育て体験。これをやっていったんです。

松村 面白いですね。

丸山 今みんなが笑顔になる企画を、みんなで考える。そうすることによって、企業が変わると社会が変わっていくんですよ。一番は社会の労働力環境が変わらない限り、子育て環境は変わらないんですよ。また防災ですよ、ここにも力を入れて勉強し、このネットワークの中でも防災も取り組んでいます。特に港区とか南区は低い所なので、実際に防災、震災にあった団体を呼んで勉強会を開いたりしています。

松村 すごいですね。狭い意味での子育て支援に限定しないで、こういう家族の絆レストランだとか、防災だとか、今のこの社会、究極的には全部育児ともつながるかもしれないけど、そういう社会課題を解決していこうというNPOの思いというか、ミッションを感じますね。

丸山 肩を叩いてくれ、押してくれた。男

性中心社会なので、女性たちが共感しても、男性が動かないと世の中動かないんですよ。

松村 今のお話でいうと、男性の育児も私、関心があって研究領域に入っているんですが、下線部、引いてらっしゃる、夫も巻き込んだ方法だっていうのも、もしよければお話しただければ。

松村 この最後の。

丸山 これですか。

松村 男性学とかって、最近でこそ注目されていますけど、昔から貴団体やってるんだなと思って。

丸山 やってました。

松村 これはどういう。

丸山 女性がどんどん社会進出というか、社会活動をすると、夫とのコミュニケーションが取りにくくなって、夫は会社内のコミュニケーションはあるけど、社会でのコミュニケーションが少ない、男の人にも私たちが学んでいることを、一緒に学び社会課題を知ってほしいということからスタートしました。勉強会をすると、人が集まって、北生涯学習センターを会場にスタートさせたんです。大阪はその頃、男性学が積極的で。

松村 関西のほうが割とそうかもしれないですね。

丸山 そう。関西の人たちに来てもらい、講師になってもらって、私たちが活動していることを、男性社会にも分かってもらうために、生涯学習センターの予算取っていただき、講座をしました。

松村 今は時代が追い付いてきたというか、パパ講座も盛況だって伺いますしね。

丸山 そう。私は、5年、10年先が見えてくるっていうか想像できるんですよ。だからこそ、走っちゃうこともあるので、理解してもらえないこともあるんだけど。そういう意味では、理解してくれる人が周りにいっぱいいてくれてよかったなと思っています。

松村 最後のまとめの3行が素晴らしいので、この部分はせっかくなので、文章に書いてくださってはいるんですが、インタビューにも入れたかったので。

丸山 今、言いますか。

松村 はい。

丸山 自分の子育ての経験の中で、子育て中であつたらいいなって感じたことを、仲間と学びながら形にしてきました。まめっこの活動の中から得た経験をもとに、人と人をつなげる場を持って、子育てが楽しいという街を目指してきました。自分自身の生き方をたくさんの方から学びました。私らしい人生を歩んでいます。

松村 ありがとうございます。最初に名古屋、全然知らない所に越してこられて、疎

外観とか孤立感とかを抱えていた日々から、今この、すごくファミリーヒストリーじゃないけど、私としては、すごい物語だなと思って伺ってきました。

丸山 次の世代の人たちには、今はいばらの道かもしれないけど、それを花畑にするような、前向きな気持ちと夢を持ってやってもらえると、「街は変わっていくよ」って応援します。

松村 丸山さんのこれまでの歩みが、本当にそうなるっていうことを確信させるような内容でした。

その点で言うと、ネットワーク。国レベル、全国もそうだし、名古屋市もそうだし、東海地方でも。同じ志を持つ様々な人たちが、お互いを支え合い、情報を共有する場が、本当に重要ですね。

丸山 そうですね。だから、子育てひろば全国連絡協議会が開く実践交流全国セミナーは、14年間熱量が変わらないのですよ。

松村 それもすごいですね。

丸山 そこが私、すごいなって。世代間交代してるんですよ。

松村 衰えず。

丸山 衰えず。

松村 それ、すごいですね。

丸山 あの熱量を変えないっていうとこ

ろが、すごいなって思ってます。それだけきっと、自分事でもあり、子どもや孫の未来のためでもあり、街のためだから頑張れるんだよね。次の世代が生まれてくるから、バトンタッチしていくからその熱量も手渡しされているのかなって、思ってます。

松村 すごく素晴らしいお話でした。

丸山 いいえ、どういたしまして。こんなお話でよかったんでしょうか。

松村 大変貴重なお話でした。ありがとうございます。



(了)